

第4回検討委員会 各委員の意見

分類	意見（要約）
一体的整備に関するもの	1つの拠点としての効果を考えると、固有の美術館、図書館、文書館を核としていくのは当然である
整備地に関するもの	緊急車両の出入り等の問題は、宇都宮市との協議が重要となるため、市民が分かるような協議の場があるとよい
整備地へのアクセスに関するもの	一番近いLRTの停留所から本施設までの間を楽しく、快適に、安全に歩行できるように、道路、歩道の整備を検討する必要がある
	日光街道1本しかなく、道幅も広くないため、西側と北側にある細い道を拡幅する等、迂回のような形で、交通の進行方向を考えれば混雑せずにアクセスできると思われる
	施設計画上、出入口をたくさん作ることは難しいため、動線計画において、特に車・バス・自転車・LRTから歩いてくる人の動線を検討することが重要
	県立博物館も含め、桜通りの南北をつないで地域を盛り上げてほしい
目指す姿に関するもの	若年層や子育て世代に利用してもらうためには、新しい行き場としてだけでなく、具体的な使い方を想像できるテーマ性があるとよい
	目標値については、この段階で定めるよりも、まずはしっかりと、どんな施設を作るかを考えていくべきである
	来館者数を増加させたいと思う一方で、デジタル化により来館せずに家で閲覧することができることも想定されるため、来館者数の目標値にとらわれず、目指すべき姿を考えることが求められている
	一般的に「文化＝高尚なもの」として、クラシカルでオーセンティックに捉えられることが多いが、これからの文化は裾野を広げて、アニメやマンガ等、ポップでサブカルチャー的なものも積極的に採り入れていくことも大切である
建物（建築）に関するもの	文書館と図書館については、性質が非常に似ているので、一緒にプログラムを実施するのもよい
	それぞれの建物をつなぐ動線と、LRTを降りたところからの動線、敷地内に入ったときの動線は必要である
	雨の日の図書の持ち歩きなども考慮し、地下駐車場があるとよい

建物（建築）に関するもの	合築の場合、一部共有が望ましい
	地下に駐車場を作り、上に公園と植栽にして憩いの場所ができれば、県民が集まる機会となる
	一部共用の施設整備は、大変賛成である
	一部共用で建物を一体化するのはよい
	スペースの都合、駐車場が課題になるため、地上だけではなく地下に作ることも考えられる
	一部共有の合築に賛成である
	3館の入場料の有料、無料の考え方はどのようになるかが、建物設計にも影響してくる
	合築の場合①のパターンは、図書館と文書館は完全独立ではなくとも、多少つながりあっても（近接していても）良い
建物（諸室）に関するもの	図書館は滞在時間が長いことから、適切なゾーニングにより、子どもが遊べる場所や、研究や創作的な活動が出来る場所など、本のための場所ではなく、人のための場所として整備することが重要
	アーツライブラリーは、せっきやく一体化するのであれば、美術品の横に関連書籍を配架する等ができる大変魅力的
	共用スペースは合築案の配置構成が前提になることから、企画運営部門がどの施設に組み込まれるか、共用スペースの中に組み込まれるかを考える必要がある
	共有部分に荷物を預かるクロークスペースが必要
	一部共有する形の合築イメージでは一体化が強すぎ、共用スペースが真ん中にあり、美術館、図書館、文書館がそれぞれ独立した円として存在していて、それらが線で繋がっているイメージのように、各施設の独立性をある程度保つ必要がある
	新しい共有スペースの生み出し方や、既存機能のある各館スペースの新たな繋がり方が議論されていない
	レストランやカフェ等のスペースは共有でよいが、各館固有の機能は個別がよい

建物（諸室）に関するもの	共有スペースで刺激を受けた人が、各館に入っていくイメージのように、共有スペースは誰でも入れるが、そこから先は、各館ごとの入り方がある形がよい
	共用スペースでパーティーができる等、共用スペースの新しい使い方をユニークベニューとして栃木県の魅力になるとよい
	父親と子どもで利用したい人等もいることから、授乳室は女子トイレではなくキッズルーム内に設けるべき
	大災害時の動線を考えると、特定の場所に集まり誘導するのも一案になるため、共用スペースを人が集まる避難場所にするるとよい
	一部共有の方向とし、共有スペースにおいて3館が一緒に活動し、子どもにとって教科を超えた学びの場があるとよい
	収集・保存を考えると、共用スペースには、適切な収蔵環境と、将来を見据えた収蔵スペースの確保が3館共通して大切である
	民間活用向けのスペースがあると、経済的にもランニングコストの手助けになる
	学習室が図書館にしかないが、3つ施設が共有で使えて、目的のある人だけでなく、何気なく立ち寄った人が話し合える、大学のラーニングコモンズのような学習スペースが、アメニティとは別に必要である
	各館の独自性を尊重しながら、共用部分をいかに実現し、どこまで共用にできるかが、相乗効果を得るために重要
	県民ギャラリーは、若手や色々な人が参加してモノを創造する場所として、柔軟性があり、自由度の高い空間を整備できるとよい
	拠点整備の際には、収蔵スペース収蔵能力を充実させるとよい
	一体的な整備により、図書館とアトライブラリーは一本化できる
	展示テーマに関連する本は、共有スペース内の美術館よりの無料エリアに設けるとよい
	共有スペースに、各文化施設の内容に関する入門的な「体験から学ぶ」スペースを設置することで、各館への導入機能を担えるとよい
若年層のデートスポットや、集まるスペースがないため、このようなスペースを作るとよい	

建物（諸室）に関するもの	県産の美味しいものを食べられ、おいしいお酒が飲めるレストラン等もあるとよい
	文書館の諸室について、資料の保存に係る研修、ワークショップ等は水を使用するため、研修室に水を設置することを配慮して「研修室（会議室）」は、「研修室」としてはどうか
	美術館の主な諸室について、共有利用する「キッズルーム」が美術館に設置するとあるが、絵本等に触れ、読み聞かせができる場所等の想定があれば、美術館ではなく、もっと子どもや親子が利用しやすい場所に設置するとよい
	「ボランティアルーム」が美術館に設置されているが、ボランティア活動は「文化と知」の創造拠点全体としての活動にすべきであるため、美術館への設置には違和感がある
	「対面朗読室」とあるが、より広く視覚障がい者や読書困難者（ディスレクシア）等をサポートができる施設にするために、「読書バリアフリー推進室」として、高知オーテピア図書館の機能や対面朗読室の機能を備えるのはどうか
	奈良情報図書館のように、一般的なパソコンを持ち込んでの学習・研究・調査ができることに加えて、デジタル機器を利用した編集や印刷等ができるパソコン利用室を設置してはどうか
資料の保存・継承に関するもの	経済的な問題や、時代の流れとしてデジタル化が強く主張されるが、電子図書はライセンス更新が必須であることも勘案し、デジタル化と同時に本物を残すために紙ベースの収集も大切である
	資料収集の役割分担と連携では、人の動線と収蔵物の管理・提供のあり方を整理することで、業務の効率化とサービスの向上を両立させ、人とモノにとって快適で適切な環境にできる
	郷土史料は、一点物は収蔵スペースの調湿管理など、保存環境が整備された文書館スペースで、刊行物は基本資料は両方で重複して持ちつつ、原則として図書館で所持するとよい
資料の利活用に関するもの	児童・学生が調べものをするときはインターネットを使うことが多いことから、図書館の利用は、本物の資料に触れることが魅力になる
所蔵品・企画に関するもの	図書館について、郷土に関する資料が充実したコーナーがあるのは良い
	図書館には多くの方が来館するため、郷土に関するコーナーが図書館にあることが重要
	子どもの利用者数増加のために、インターネットで手に入らないような、おじいさん、おばあさんの話を実際に生で聞いたり、日本以外にルーツを持つ来館者から自分の国の話を聞いたりする取組ができるとよい
	利用促進に当たっては、人を集客できる企画展示が必ずしも良いとは限らないが、年間に複数回実施される企画展の中で学術的なものと誘客を狙うものの棲み分けが出来ると良い
	年1回でも来館してもらえらる仕組みや、義務教育や高等教育の教育プログラムの中で、来館して何か学べるプログラム作りが必要

所蔵品・企画に関するもの	「ジャズの町宇都宮」であるから、図書館では、書籍だけではなく「滝沢コレクション」や「蓄音機コレクション」等の素晴らしい音楽も大切にしたい
	単に「誘客のための展覧会」を開いての集客は、決して美術館の親しみやすさにはつながらず、むしろ、集客にはつながりにくいが、開催する意義のある展覧会に、少しでも多くの入場者が来てもらえるような工夫をすることが重要である
利便性に関するもの	子どもたちの利用に関連し、学校団体の受入れも増えていくと思われることから、バスの駐車場など、団体利用を想定した施設づくりの視点も必要
	敷地面積が大きく、3館を合築した際の敷地内の移動距離と移動時間を考えると、動く歩道のようなものがあるとよい
館相互の連携に関するもの	子どもは文書館のイメージがないため、図書館と繋がり文書館に引き寄せる仕掛けがあるとよい
	図書館・文書館の関係は、情報の入り口として図書館があり、その先に文書館があるという流れの中で連携し、ともに活動することで、両館の来館者や県全体に貢献できる
	各館機能の共有は、各館が活動しやすい環境を確保することが最優先されるべきであり、その上での効率化ということではなければならない
	広報は、各館きめの細かい広報をするために、日ごろから館の活動を傍らにいて見聞きしていることが何よりも重要であるから、3館まとめたの広報や、広報を外注することは好ましくない
	3施設の連携について、美術館と図書館、美術館と文書館をつなぐラインは企画運営部門を経由しているが、文書館と図書館は企画運営部門を経由していないため、整合性をとる必要性があるのではないか
	美術館に入館料がかかるのであれば、図書館や文書館が目的の訪問者の多くは美術館を利用しないと考えられるため、3施設の相乗効果がバックヤード（職員）に利するものか、それとも利用者に利するものか、意図するところを明確にするべき
教育機関との連携に関するもの	教育機関と連携して、幼児、中学校、高校、大学から拠点自体や栃木県の文化に惹きつける仕組みづくりが必要
民間との連携に関するもの	民間と連携すれば必ず上手くいくとは限らないため、民間連携するのであれば、お互いがWin-Winで持続可能な関係を築くことが必要
	民間との共有・協働は、美術館や図書館の商品とコラボする等の活動で、地域の中小企業の人たちと一緒に作り上げることができる
	入館者数に他館と大きな差があるため、全国平均の利用者数を目指すならば、広報に民間の力を活用するのも一案である
	カフェやレストランには、地元で有名な牧場のソフトクリームが食べられる等、県の魅力と、地元で協力してくれる企業を活用できるとよい

デジタルの利活用に関するもの (体験)	3機能の一体的な活用の相乗効果を図るため、物理的な機能の共有に加えて、資料を統合的に発見・活用できるデジタルネットワーク技術を用いたポータル機能があるとよい
	図書館と文書館の閲覧スペースを隣接させ、デジタル化を進めれば、物理的な制約をクリアして、利用の活性化が期待できる
	開館時にはSNS等で告知するなど、デジタルツールの活用は積極的にしていく必要がある
	デジタルを活用した遠隔利用に、電子書籍等の活用とあるが、民間企業が提供する通常のコンテンツは導入が難しいため、電子書籍コンテンツで文芸書を読むこと等が目的であれば不要である
デジタルの利活用に関するもの (留意点)	デジタルの導入後、定期的にユーザーの声を聴いて欲しいことから、そのような声を拾い上げる仕組みや、どのようにフィードバックするか等も検討するとよい
	システムの統合については、実際にオープンする前に議論が始められるため取組む必要がある
集い・憩い・交流に関するもの	拠点では多様な方々の交流が生まれることをイメージしているが、具体的にどのような人と人が、どのように交流する場であるかを整理する必要がある
	県の3つの施設が繋がるだけでなく、地域と繋がる目的もあるため、地域の文化施設と交流する場が1つ明確にあるよい
現場との連携に関するもの	魅力的な企画の実現には、各館ともある程度余裕を持った職員数を確保することも大事である
利用促進に関するもの	「木造・木質化等、県産木材」とあるが、例えば、ライトキューブのように、ふんだんに大谷石が使っていたり、木材以外にも栃木県を出せるモノを使用したりするのも利用促進の一策である
	利用促進については、遠方の人が、1年に一度でも来てみたいと思えるような仕掛けが必要である
	全国初の無人のバスを走らせる等、LRTの他に全国的にも注目される交通アクセスを魅力にできるとよい
管理運営に関するもの	全体を取りまとめるために企画運営部門を設置することは各施設間の交流・協力体制を考える上で重要である一方、企画運営部門の施設配置や機能についても検討する必要がある
	各館の専門家とは別に、拠点の司令塔が、どのようにスペースを共有していくかが今後着目される
	拠点を長期的・安定的に運営するには、総合的に統括するコンダクター的役割が必要

管理運営に関するもの	企画運営部門は、施設全体を統括し、栃木県の「文化と知」の方向性を形作る機能性を備えた組織として立ち上げる必要がある
	3施設の職員が必然的に交流する仕組み作りが重要である
	図書館の司書の調査能力は大変高いため、職員の専門性を生かせるような体制になると良い
	企画運営部門に限らず、各館においても、運営者として多くの県民に、例えば栃木県の美術の素晴らしさを知って欲しいという、強い思いを持つ人に館長になって欲しい
	管理運営の機能面から議論しているが、どのような人がやるべきか、どのような組織を作るべきかについても今後議論する必要がある
	各館のコア業務は独立をして存在するにしても、企画運営の開催時に職員の交流等を企画運営部門と上手く連携してやれるとよい
	広報、総務、事務等、各館の活動に密接に関わる部門は個々にあるのでよく、その上で、それを統括する企画運営部門がある方が、本当の意味で各館の活動を活かしていける
	イメージ図のような体制によって、3機関のそれぞれの機能を十分に発揮しつつも、総合的な理念、経営方針による運営が可能になる
	各館が収蔵する蔵書や所蔵品の管理等を行う業務システムは固有の機能があるため個別に持つ必要があるが、蔵書・収蔵物の所蔵データベースの統合（横断）検索の仕組みや、共通のデジタルアーカイブについては、企画運営部門が担うとよい
	デジタルの部分については、先行して進めることにより、合築後の期待感も高まることから、3館を統合した管理運営する部署は建物の合築が実現する前から着手できるとよい
	共有スペースを誰が運営するかは、総合的にコーディネートできるアートディレクターのような存在がいると生き活きた施設になる
	管理運営には総合的なコンダクターの存在が重要で、民間の活用は大賛成だが、このコンダクターには県の人材育成として、生え抜きで専門的な知識と経験を持ち、県の様々な部署を引っ張って行ける人を育てて欲しい
	企画運営部門の例として、「連携企画等の立案・運営、広報、全体調整、総務事務」を挙げているが、「館運営の統括（経営戦略）」のような仕事を、最初に例示してはどうか
楽しさを生み出すのは民間の力が重要になるため、企画運営部門の役割に、「官民連携」または「民間との連携」等の言葉があると、運営に「楽しさ」も付加されるのではないか	

中間案に関するもの	「つなぐ」機能と役割に関連し、繋がる先として、社会教育だけでなく学校教育も併記してはどうか
	バリアフリーコーナーと記載があるが、子どもから障害者を含め、高齢者や外国籍の利用者等を考えると、ユニバーサルデザインと表現するのがよい
	コンセプト「開く・つなぐ・育む」は、ひらがなとしてはどうか
	図書館の新たな求められる機能について、「読書バリアフリー」若しくは「誰もが読書ができる」等の言葉を入れてはどうか
	「開く」機能の役割に「だれでも」とあるが、「共生社会」のところで「バリアフリー」「包摂的」といったキーワードがあるとよい
	図書館の「利用者が読書や調べものを行う場所や 環境を提供する」に、グループで学び合う場所を追加してはどうか
	図書館の「利用者が資料を活用して調査・研究を行う際に役立つツールを作成する」に、資料のデジタル化を追加してはどうか
	図書館の「教育機関等の様々な分野と連携した講座の実施等により、利用者の学びや新たな価値の創造を支援する」に、栃木県ならではの産業を追加してはどうか
	3施設が連携した機能の考え方の収集・保存に、資料の横断的検索機能の提供等を追加してはどうか
	図書館の新たに求められる機能に、図書館へ行く目的の多様化や訪れた人々の「知の追求」を追加してはどうか
	3施設が連携した機能の考え方のアメニティに、国内外に向けた情報発信を追加してはどうか
アーティストや一般の方が自由に制作を楽しめるような雰囲気があり、多くの方が鑑賞以上の関わり方をできる場所として、作家が施設内で実際に創作できることも面白い要素と感じる	